

# スクールカウンセリングにおける教師とカウンセラーの連携 —アメリカ・ノースカロライナ州の公立学校の事例に学ぶ—

広島大学附属三原中学校 教諭 今川卓爾

## 【キーワード】

カウンセラーや養護教諭との連携  
ガイダンスカウンセラーの役割

## 1. はじめに

報告者は、平成13年3月下旬から4月上旬の2週間、アメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立学校を訪問する機会を得た。ここでは、本務の他に現地の公立学校におけるカウンセリング事情を実際に観察する機会を与えられた。ここでは、カウンセラーと教師の連携に焦点をあてつつ、現地の学級における生徒指導とカウンセリングに、カウンセラーや教師がどのように関わっているかを報告し、あわせてわが国の学校カウンセリングと教室経営の課題を考察したい。

## 2. 研究の内容

### 《研究報告題》

アメリカ・ノースカロライナ州の公立学校の事

例から、スクールカウンセラーにおける教師とカウンセラーの連携の可能性を探る

### (1) 研究の方法

#### ① 研究仮説

教師は養護教諭やスクールカウンセラーと連携することで、学校の教育効果が向上するであろう。そのためにはどのような教育的条件が必要かを探る。

#### ② 研究方法

観察法を用いて、アメリカの公立学校における、教師と養護教諭やスクールカウンセラーとの連携の実態及び、その課題を把握することで、日本の学校における教育条件の改善に必要な課題を探る。

#### ③ 観察調査の期間

平成13年3月27日～同年3月30日

### ④観察調査の日程

| 日 時      | 観察調査場所      | 観察調査内容                     | 関係者・関係機関  |
|----------|-------------|----------------------------|---|
| 3/27 (火) | マーチンミドルスクール | スクールカウンセラーの仕事場所及び仕事内容の調査観察 | Ms. Susan, A. Mayer<br>Martin Middle School<br>400E. Johnston Street<br>Tarboro, NC 27886   |
| 3/28 (水) | マーチンミドルスクール | スクールカウンセリング現場の観察           | Ms. Susan, A. Mayer<br>(Counselor)<br>Martin Middle School<br>400E. Johnston Street<br>Tarboro, NC 27886                                    |
| 3/29 (木) | マーチンミドルスクール | 前校長及びスクールカウンセラーへの聞き取り調査    | Ms. Susan, A. Mayer<br>(Counselor)<br>Mr. Wayne Miller<br>(Principal)<br>Martin Middle School<br>400E. Johnston Street<br>Tarboro, NC 27886 |

|          |           |   |   |
|----------|-----------|---|---|
| 3/30 (金) | ウォルコッツ小学校 | ①スクールカウンセラーの仕事場所<br>及び仕事内容の調査観察<br><br>②前校長及びスクールカウンセラー<br>への聞き取り調査 | Ms. Judy Frye<br>(Guidance Counselor)<br>Mrs. Judy Budacz<br>(last year Principal<br>Wahl-coates School<br>2200 E. Fifth Street<br>Greenville, NC 27858 |
|----------|-----------|---|---|

## (2) 観察調査研究

### ① マーチン中学校の事例

本校は、ノースカロライナ州の州都ローリーから東方へ車で2時間のところに位置するターボロ郡内にある公立中学校であり、6年生から8年生までの生徒たちが在学している。

日本の学制では、小学校の6年生から中学校の2年生までに相当する。

生徒たちは朝のホームルームで出欠点検を受け、その日の日課を確認したのち、必修や選択の課目にそれぞれが分かれて教室を後にする。教室の移動の際には、廊下に一列に並んで私語なく静かに移動していた。移動先の教室のドアが閉められて授業が始まる。廊下の途中に、見慣れぬ札の掛かった部屋がある。このISS (In School Suspicion) という部屋には、すでに数人の生徒がいた。この部屋には専門の担当職員が常駐している。悪口やケンカ、悪態など、規則を違反した生徒がここに入れられて、反省したり自分の課題を見つめなおしていた。各教科担任の教師が手に負えないと判断した生徒は、紙のカードをもらい、ここに来るのである。

報告者が授業をおこなったクラスのうち、日本語選択クラスの7年生(12名中、男子1名、女子11名、黒人8名、白人4名)に、日本語を選択した動機を尋ねたところ、3名は日本へ旅行したいからと答え1名は食料店の売り子になったときに役立つと答えた。その他の2名は、カウンセラーがこの科目を取るようアドバイスしたからと答えた。その他に授業をおこなった6年生の教室では、机を壁に向けて黙々とノートに何かを筆記している生徒がいる。1校時中ずっとこの状態で彼は机に向かっていて、授業後に、この生徒に尋ねたところ、彼はケンカをしたので罰として、ノートに「僕はケンカをしました」という意味の言葉を100回書くようにこのクラスの担任教師から命じられたと

のことであった。

この学校では、生徒総数800名に対して専任のカウンセラーが2名常勤している。彼女らは、生徒を400名ごとに分けて、それぞれが分担して仕事に当たっている。この学校のカウンセラーは、生徒に各教科内容を教えることはないが、生徒に将来のキャリアについて考えさせたり、よりよく勉学するためにはどうしたらよいかなどについて、生徒に分からせたり、悟らせる指導をしていた。これ以外に、生徒の家族の悩みであるとか、生活上の悩み、生徒間の争いの解決などを支援する仕事もしていた。

一部の生徒は、時々ナイフを持って学校に来ることがある。この場合には、直ちに警察に連絡が取れるようにしてある。この学校のPTA組織は月に1回水曜日に、問題行動傾向のある生徒の保護者などと学校関係者同士が、地域のコミュニティーセンターや校内のメディアセンターで、交流の集いを開いている。そこでは子育ての成功例や生徒支援の成功例を具体的に示して、保護者を教育している。この集会では保護者に具体的な行動変容を促すために、必ず最後にシェアリングを行っている。

ランチタイム終了後に、週1回のカウンセリングタイムが持たれるとのことで、参加して観察する機会があった。ISS扱いとなっている7年生のA君をはじめ4名の男子生徒が、Mカウンセラーの部屋にやって来た。この部屋の奥に教室ほどの広さの部屋があり、部屋の中には長方形に組み合わされた机が置かれ、パソコンやガイダンス関係の資料やポスターなどが貼られたり配置されたりしている。部屋に入って席についた子どもたちは、全員がこの日の読み物を読み合わせた。Mカウンセラーは、「じょうずね」「すばらしいわ」としきりにほめた。一人ひとりが紙のカードを担当教師から預かって来ている。Mカウンセラーがサインをする欄や日付記入欄がある。下半分には、どこで何をした

かを記入する欄があり、担任教師が点検する欄もあった。

ここに来る生徒には、できるだけ自分のことを自分で振り返られるように心がけていると、Mカウンセラーは強調していた。

ここに来る生徒は、多いときには20名を超えることがある。これは一人のカウンセラーには多すぎる数であり、職務の遂行にとって深刻な問題と彼女は認識していた。この生徒たちは放課後を、バスケットボールやビデオ、30分ほどの宿題などで過ごす。

### ② ウォルコッツ小学校の事例

この小学校は、ターボロ郡内の公立小学校である。この小学校でスクールカウンセラーを勤めているFカウンセラーは、職務の内容と校内の指導体勢について次のように考えている。

まずカウンセラーにとっては、学校を和やかな雰囲気にする 것과子どもにとって安全な場所にするのが大切と考える。この学校では、教師が30名とアシスタント教師数名、カウンセラー1名に加えて定年退職した地域の大人のボランティアが大勢でこの学校を支えている。この学校は2年間の公的補助を受けており、校長以下が皆同じ理想に向かい、家族的な雰囲気の中で仕事をしている。「地域の小学校とはどうあるべきか」についての校長の見解や見通しは、教頭や教師へフィルターのように濾されて確実に伝達されている。カウンセラーは、教科の内容を教えたりはしないが、性教育や麻薬防止教育などでは、校長の指示でカウンセラーが直接授業をおこなうことがある。

一人の低学年の児童が泣きながらやって来た。友達とケンカをしたあと、激しく泣き続けている。Fカウンセラーはこの児童の肩を抱いて、小声で話しかけた。

### ③ アメリカ人教師へのインタビュー

マーチン中学校でも学年を担当しているM教諭に、学級担任制や、スクールカウンセラーとの連携について、聞き取り調査を試みた。

過去に日本の中学校を訪問し、学級担任制に興味を持つに至ったM教諭は、アメリカのスクールシステムについてこのように述べている。各教師が教科の内容を教え、スクールカウンセラーが子どもの心のケアや進路指導、教科選択指導を行うアメリカの仕組みは職能分離が徹底した結果といえる。これは、専門知識のある人間が確実に職務を遂行することのできる長所が

ある。一方子どもは、授業中にも放課後にも、一つながりの人生を生きている。従って、授業中の子どもの様子が気になる場合は、その子の家庭の悩みや心や体の悩みと無関係ではない。このときに、スクールカウンセラーと緊密に連携し合い、適切な支援を行うことで、その子どもの学習成果に大きなプラスの影響をもたらすことができる。

報告者の観察によると、この「スクールカウンセラーと緊密に連携し合う」教師が少なかったようである。上記のMカウンセラーは、このことを職能分離の弊害と考えている。

## 3. 研究の結果と考察

日本の教室現場ではどうであろうか。学級担任教師は、担任するおよそ40名の児童生徒の学習指導に始めて、性教育、進路指導から心のケアまで、あらゆる場面の指導とケアを担当しているのが現状である。

しかし、このような場面でも、養護教諭との連携は不可欠である。担任教師の視野の範囲を広げ、多角的な視点で子どもの成長を見届け、時として必要な支援や指導を行うためには、児童生徒を直接には評価することのない養護教諭との連携が大いに重要となる。

アメリカのスクールカウンセラーが遂行していた、ガイダンスカウンセラーとしての技能や能力が、日本の教師や養護教諭にも求められるようになると考えられる。学校は、個々の生徒が自己の人生を開発するために必要な支援を提供するところであると同時に、社会の発展に必要な有意の人材を生み出すところでもある。

児童生徒を直接に評価する立場の教師ではあるが、彼らに人生のモデルを提示したり、思考の切り替えや発展、受け止め方の開発などを支援することは十分に可能であり、必要であると考えられる。

そして、何よりも凝集性の高い学びの準拠集団を組織開発し、認知と情意とを統合することのできる教室を構築することが大切と考える。つまり、子どもたちが、「何のために自分は学ぶのか」を自分に問う力量を身に付けるための支援をすることが求められており、カウンセラーも教師もこうした子どものニーズを開発し、支援することが学校では必要とされるようになると考えられる。

#### 4. 謝 辞

今回の個別研究に際しては、多くの方々から惜しめない協力と暖かい支援を受けることが出来たおかげで、この観察調査が可能となりました。とりわけ、大阪教育大学の米川英樹教授、ECUのMr. Donald Spence教授は、GPSのコーディネータとして報告者の希望

にそうように調整してくださいました。広島大学の小篠敏明教授は、滞米期間中に、幾度となく報告者に貴重なご示唆をくださいました。また、広島大学の朝倉淳先生は、広島チームの調整役として滞米期間中のすべてにわたって報告者をサポートしてくださいました。ここに記して、心からお礼を申し上げます。



# グローバル・パートナーシップの展開

## — Exploris Middle Schoolを訪問して—

広島大学附属東雲中学校 教諭 三 柁 正 典

### 1. はじめに

私が訪問したExploris Middle Schoolは、州の西部に位置する「ローリー」というノースカロライナでは2番目に大きな都市の中心地にあり、「博物館立中学校」というアメリカ全体においてもユニークな教育システムの学校で「Exploris博物館」と隣接して学校が建てられている。Exploris博物館は、来館者に地球と人との関わりに興味・関心をもたせ、大きな冒険心を導き出すことを目的としている。館内では、いろいろな国の文化や生活様式などを紹介し、それらを見て学ぶことで、新しい交流をつくり出していこうとする機会を多く設けている。博物館が学校を併設したのも、この大きなコンセプト（教育プログラム）に基づいているものと思われる。私が訪問したときは、8th gradeがボストンに修学旅行に参加していたため、6、7th gradeのみの参観となった。

Exploris M. S. は各学年2クラスあり、1クラス約28名で全校生徒168名の比較的小規模な学校である。Exploris [冒険] の名前のように各学年の先生を中心に常に実験的に色々な教材・題材に取り組んでいるのが印象的であった。

6th grade 56名 (4teachers)

7th grade 56名 (4teachers)

8th grade 56名 (4teachers)

### 2. 授業を通して

Exploris school is experimental school. As such,



many experiments are made there some are successful some are not.

Students learn best by doing experiments. They learn from all things.

#### GLOBAL ART

- Art • Physical Education
- Foreign Language (Spanish French)

#### MATH

#### PRIME GROUP

- 14student/Prime group
- Students set weekly goals/Assess goals

#### THEME

- Thematic unit/Integrated curriculum
- [Language arts Math Social Studies Science Technology]

授業は、基本的には大まかな「テーマ」は教師スタッフが設定し、細かな「課題」は生徒が設定し、取り組んでいく形式を取っている。1日の学習スケジュールは、個々の生徒によって異なり、朝のHRで各自が確認して1日がスタートし、学習の自己評価と家庭学習の確認を担任と共に行い1日が終了する。カリキュラムは大きくGLOBAL ART、MATH、PRIME GROUP、THEMEの4つに分かれており、教科の内容によって2～4の小グループに分け（MATHは能力別）学習させている。

それぞれの授業は、「教科書」を中心に行う日本とは異なり、教師が独自に作成した場合が多い。授業スタイルも机を整然と並べたスタイルではなく、ある生徒はソファに、ある生徒は机に、ある生徒はテーブルにと比較的自由でリラックスした形を取っている。私が訪問している中で特に興味を持ったのが、DEAR (Drop Everything And Read) という全員が私語をやめて読書を行う時間が設定されている授業と、Friday's at GLENWOODという毎週金曜日の午前中にGLENWOODの施設に訪問する授業であった。与えられた時間の中でDEARでは、あくまでも個人の世界に集中させ、GLENWOODでは外に向け直接多くの

社会人と関わりをもたせていた。とても対照的な授業ではあるが、生徒一人ひとりに多くの準備と気づきが必要されていて、生徒の表情からも自らが自らの意志で取り組んでいる意欲を他者と関わる活動から感じることができた。

### 3. 学校環境をとおして

文頭でも述べたが、Exploris M. S. は、「博物館立」というユニークな環境の中にある。

私が訪問している期間中にアフリカの民族音楽とロシアの舞曲団の発表がMuseumで企画されていた。いずれも全生徒が鑑賞していた。常に新しい文化交流を企画していくMuseumのスタンスは、生徒の興味関心を高めており、授業という枠にとらわれなく色々なことを学習できる状況を作っていると思われる。また、1年に1回の校外学習にも訪問期間中体験することができた。1学年(7th grade)が校外の川の清掃を行うという行事である。その授業の指導にはMuseumスタッフが参加し、清掃を行うと同時にスタッフを通し川の生き物の学習(資料1)もしていた。常にMuseumとの関わりをもちながら総合的に取り組んでいくシステムは、今まさに日本でも求められている「総合的な学習の時間」の一つのモデルを見たように思えた。

### 4. 姉妹校提携とその経緯

7月8日(日)附属東雲中学校(体育館)でExploris M. S. との姉妹校提携の調印式が行われた。

本校は、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに平成11年度より参加し、昨年の夏にExploris M. S. から先生(Mr. Eric Westendorf)が派

遣されたことをきっかけに、生徒の電子メールや電子掲示板による意見交換などの交流が始まった。今年の春にExploris M. S. を訪問するなかで姉妹校提携の話が持ち上がり、今年の夏、再び2名の先生(Ms. Juliana Thomas Ms. Jenne Scherer)の来日を機会に具体的に姉妹校提携の調印となった。調印式では、本校の吹奏楽団が両国の国歌を生演奏し、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトディレクターのドン・スペンス先生(ノースカロライナ大学教授)、コーディネーターの朝倉 淳先生(広島大学大学院教育学研究科講師)がそれぞれお祝いの言葉を述べられた。またExploris M. S. の美術の授業で生徒が制作したキルトがプレゼントされるなど華やかでかつ厳粛な雰囲気であった。

当日は、日曜参観日でもあり、多くの保護者の参列とともに調印を祝った。協定書には、両校の教官、生徒の交流の推進・蔵書と情報の交換などが記載されており、夏休み後アメリカの新年度スタートを機に、テレビ会議など具体的な交流がスタートする。

### 5. 今後の交流計画

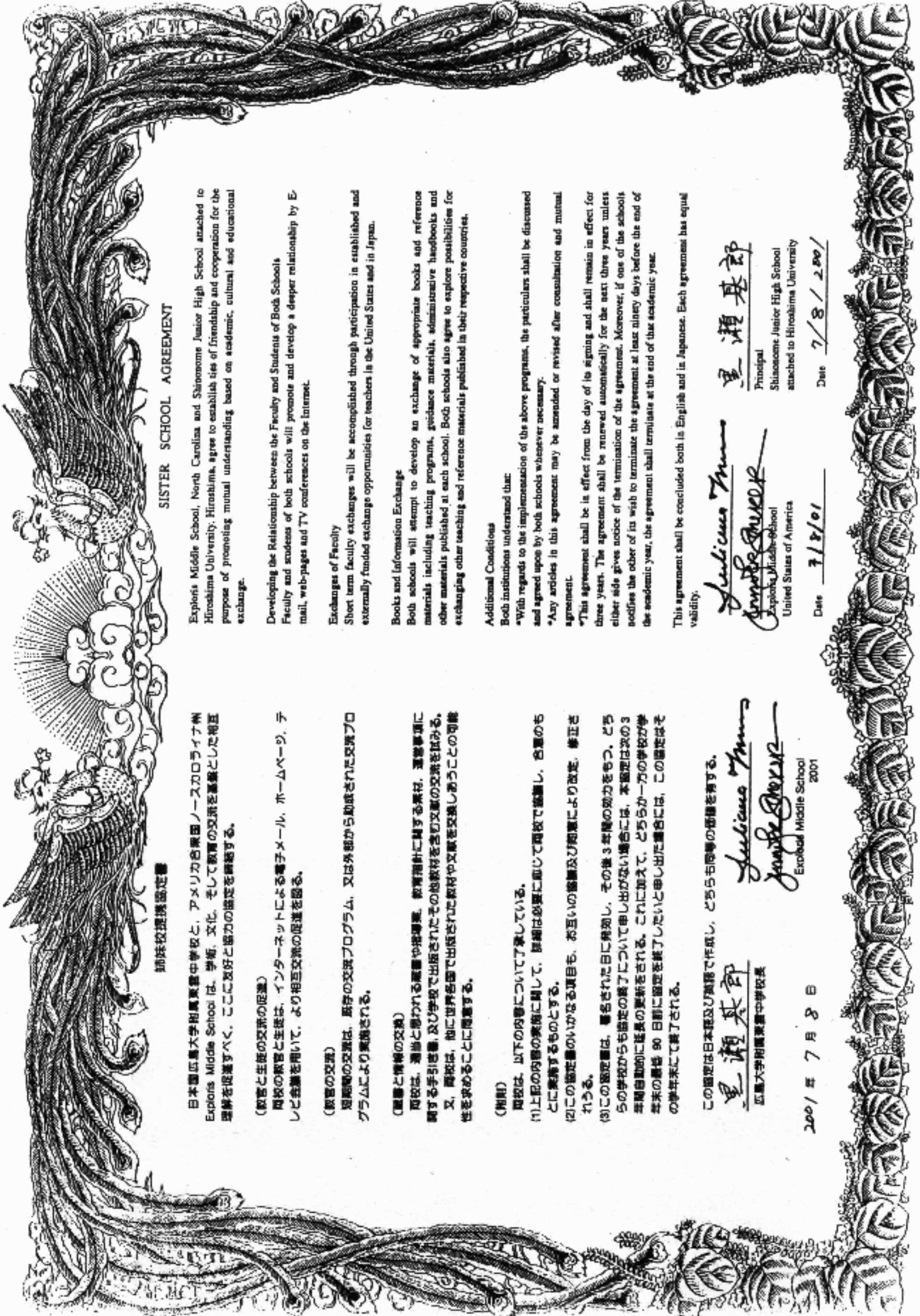
姉妹校提携後の交流のスタートとしてテレビ会議を計画している。その後e-mailを通して生徒同士の自己紹介を行い、個々で自由に情報交換が出来る状況を作り、共通のテーマを設定し、学習させていく計画である。課題は、時差で、スタートのテレビ会議からその課題に直面していくが、お互いの時差を直接体験していく上においても逆に重要であると考え。連携の第1歩でもある。

姉妹校提携調印式次第

- 1 開 会
- 2 国歌演奏
- 3 来賓紹介
- 4 本校 校長あいさつ
- 5 Exploris Middle School 代表者あいさつ
- 6 生徒代表あいさつ
- 7 経過報告
- 8 調印式
- 9 来賓祝辞
- 10 祝電披露
- 11 閉 会







姉妹校提携協定書

日本国広島大学附属東豊中学校と、アメリカ合衆国ノースカロライナ州 Exploris Middle School は、学術、文化、そして教育の交流を基盤とした相互理解を促進すべく、ここに友好と協力関係の協定を締結する。

(教育と生徒の交流の促進)

両校の教員と生徒は、インターネットによる電子メール、ホームページ、テレビ会議を用いて、より相互交流の促進を図る。

(教育の交流)

短期間の交流は、両校の交流プログラム、又は外部から助成された交流プログラムにより実施される。

(図書と情報の交換)

両校は、適当と思われる図書や指導書、教育用計に関する素材、運営事項に関する手引き書、及び学校で出版されたその他教材を含む文庫の交換を試みる。又、両校は、他に世界各所で出版された教材や文庫を交換しあうことの可能性を求めるとに同意する。

(附則)

両校は、以下の内容について了承している。

- (1)上記の内容の実施に関して、詳細は必要に応じて両校で協議し、合意のみに実施するものとする。
- (2)この協定書のいかなる項目も、お互いの協議及び同意により改定、修正される。
- (3)この協定書は、署名された日に発効し、その後3年間の効力をもつ。どちらの学校からも協定の終了について申し出がない場合には、本協定は次の3年間自動的に延長の更新をされる。これに加えて、どちらか一方の学校が学年末の最後 90 日前に協定を終了したいと申し出した場合には、この協定はその学年末にて終了される。

この協定は日本語及び英語で作成し、どちらか同等の価値を有する。

星瀬基郎  
広島大学附属東豊中学校長

Judicious Tamm  
Exploris Middle School  
United States of America

2001年7月8日

SISTER SCHOOL AGREEMENT

Exploris Middle School, North Carolina and Shionome Junior High School attached to Hiroshima University, Hiroshima, agree to establish ties of friendship and cooperation for the purpose of promoting mutual understanding based on academic, cultural and educational exchange.

Developing the Relationship between the Faculty and Students of Both Schools Faculty and students of both schools will promote and develop a deeper relationship by E-mail, web-pages and TV conferences on the Internet.

Exchanges of Faculty

Short term faculty exchanges will be accomplished through participation in established and externally funded exchange opportunities for teachers in the United States and in Japan.

Books and Information Exchange

Both schools will attempt to develop an exchange of appropriate books and reference materials including teaching programs, guidance materials, administrative handbooks and other materials published at each school. Both schools also agree to explore possibilities for exchanging other teaching and reference materials published in their respective countries.

Additional Conditions

Both institutions understand that:

- \*With regards to the implementation of the above programs, the particulars shall be discussed and agreed upon by both schools whenever necessary.
- \*Any articles in this agreement may be amended or revised after consultation and mutual agreement.
- \*This agreement shall be in effect from the day of its signing and shall remain in effect for three years. The agreement shall be renewed automatically for the next three years unless either side gives notice of the termination of the agreement. Moreover, if one of the schools notifies the other of its wish to terminate the agreement at least ninety days before the end of the academic year, the agreement shall terminate at the end of that academic year.

This agreement shall be concluded both in English and in Japanese. Each agreement has equal validity.

Judicious Tamm  
Exploris Middle School  
United States of America

星瀬基郎  
Principal  
Shionome Junior High School  
attached to Hiroshima University

Date 7/8/01 Date 7/8/2001



# 日米の中学生における色の感じ方の比較研究

— 広島大学附属東雲中学校と Exploris Middle School の中学生の比較を通して —

広島大学附属東雲中学校 教諭 三 柁 正 典

## (1) はじめに

色はいつでも誰でも自由に楽しむことができるものである。特に四季をもつ日本の環境は、様々に変化していく四季折々の花や草木、海・山・空の微妙な変化を感じ取り、それぞれにふさわしい色名をたくさんつけ、生活の中に取り入れてきた。私の勤務する東雲中学校の「東雲色」も明け方の東の空の色（浅い黄みの赤）を表している。

しかし、学校生活、学習環境における色彩の意識は低く、ほとんどが白い壁に囲まれた空間のなかで学習している現状である。一方米国においては州や地域、学校などの特色を表現していくとき、文字通り「色」を使っている場合が多い。私が今回訪問したいくつかの学校も自分の学校のイメージ色を色々な空間に飾り、自分たちの学校生活の中に取り入れていた。今回、色を積極的に学習環境に取り入れている米国 (Exploris

M. S.) の生徒と本校の生徒との色に対する感じ方を比較し、色が心理的にどのように作用し、どのように効果的に働くのか、研究の糸口を探ることができたらと考えている。

## (2) 研究の概要

### ① 研究の目的

日米の中学生における色の感じ方を調査・比較し、今後の学習環境づくりのあり方を探る。

### ② 研究の方法

- ア. 日米の中学生の色に対する感じ方の調査をし、状況を分析する。
- イ. アメリカの学習環境における色の使用状況を調査する。

### ③ 現地調査の日程

| 日 時                        | 場 所   | 内 容   | 関係者・関係機関           |
|----------------------------|---|---|--------------------|
| 3/26 (月)<br>8:00~<br>15:00 | The office of the Dean of<br>ECU Educational Faculty<br>The office of International<br>Affairs<br>Martin Middle School<br>Wahl Coats Elrmrntary<br>School<br>New Bern High School | ECU教育学部長と面会<br>ECU国際交流課を訪問<br>マーチンミドルスクールを訪問<br>(昼食)<br>ウォルコート小学校を訪問<br>ニューバーンハイスクールを訪問 | Dr. Don Spence     |
| 3/27 (火)<br>8:30~<br>15:00 | Martin Middle School  | マーチンミドルスクール<br>学校視察及び授業観察   |                    |
| 3/28 (水)<br>8:30~<br>15:00 | Exploris Middle School  | 6th grade授業参観<br>色についてのアンケート<br>校内の施設設備の見学<br>Exploris Museumにおける授業の見学                  | Ms. Juliana Thomas |

|                            |                        |   |                   |
|----------------------------|------------------------|---|-------------------|
| 3/29 (木)<br>8:30~<br>15:00 | Exploris Middle School | 7th grade授業参観<br>色についてのアンケート<br>折り鶴づくり授業<br>課外クラブ参観<br>Exploris Museumの施設見学         | Ms. Jenne Scherer |
| 3/30 (金)<br>8:30~<br>15:00 | Exploris Middle School | 7th grade授業参観<br>Glenwood Tower訪問<br>生徒の活動参観<br>Stream Community Service<br>生徒の活動参観 | Ms. Jenne Scherer |

### (3) 研究の結果と考察

#### ① 日米の中学生の色に対する感じ方の調査と分析について

表1 色の好みについて (%)

|         |    | 黄    | 橙    | 赤    | 青    | 紫    | 桃    | 黄緑   | 緑    | 茶    | 白    | 灰    | 黒    |
|---------|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 日 本     | 好き | 45.5 | 55.1 | 33.9 | 69.2 | 41.0 | 19.2 | 53.8 | 58.3 | 3.8  | 71.1 | 16.0 | 61.5 |
|         | 嫌い | 4.4  | 2.5  | 14.7 | 5.7  | 17.3 | 28.8 | 9.6  | 14.1 | 52.5 | 1.9  | 30.1 | 4.4  |
| ア メ リ カ | 好き | 12.7 | 45.4 | 50.9 | 64.5 | 33.6 | 35.4 | 64.5 | 50.9 | 17.2 | 53.6 | 37.2 | 73.6 |
|         | 嫌い | 38.1 | 10.9 | 15.4 | 9.0  | 46.3 | 47.2 | 11.8 | 15.4 | 49.0 | 9.0  | 30.9 | 3.6  |

Exploris 110名 (6, 7th grade) と東雲中学校 156名 (1, 2年生) を対象に共通の12色の色カード (黄、橙、赤、青、紫、桃、黄緑、緑、茶、白、灰、黒) を見せ、好みの色など色についてのアンケート (資料1) を行った。色についての回答は、複数回答は可とした。表1は、色の好みをまとめたものである。色の好き、嫌いについては、衣食住などの生活環境から生じる、一人ひとりの好みの違いによって変わってくると思われるが、日米の同じ発達段階の子どもたちからは、ほぼ同じ結果を見ることができた。このことは、生活環境に大きな変化がないことと、同じ発達段階で感じる色の感じ方に、大きな変化がないのではないかとと思われる。ただ1色 (黄色) に関しては、大きな違いが出た。日

本では、黄色に関して「嫌い」と答えた生徒は、全体の約4%に対して、アメリカでは、約38%の生徒が「嫌い」と答えている。「嫌い」と答えた理由は、ほとんどの生徒が「明るすぎる」「まぶしすぎる」である。日本の生徒からは、回答の理由としては先ず上がらない言葉である。このことは、目 (ひとみ) の色の違いが顕著に出た結果ではないかと考える。

表2~8は、12色の色カードの中から「今/Now」「幸せ/Happiness」「悲しき/Sadness」「怒り/Anger」「性的/Sexy」「成功/Success」「心/Heart」をイメージする色を選ばせたものである。

色の好みに対して、言葉からイメージする色に関しては、それぞれ日本とアメリカとでは、違いが「好み」

表2 「今/Now」をイメージする色 (%)

|         | 黄    | 橙    | 赤    | 青    | 紫   | 桃   | 黄緑   | 緑    | 茶   | 白    | 灰   | 黒   |
|---------|------|------|------|------|-----|-----|------|------|-----|------|-----|-----|
| 日 本     | 5.1  | 24.3 | 3.8  | 23.0 | 6.4 | 1.2 | 7.6  | 10.2 | 0.0 | 11.5 | 6.4 | 6.4 |
| ア メ リ カ | 17.7 | 25.3 | 10.1 | 13.9 | 6.3 | 8.8 | 12.6 | 6.3  | 3.7 | 3.7  | 7.5 | 1.2 |

表3 「幸せ/Happiness」をイメージする色 (%)

|         | 黄    | 橙    | 赤    | 青    | 紫   | 桃    | 黄緑   | 緑   | 茶   | 白    | 灰   | 黒   |
|---------|------|------|------|------|-----|------|------|-----|-----|------|-----|-----|
| 日 本     | 35.8 | 19.2 | 10.2 | 2.5  | 1.2 | 30.7 | 6.4  | 3.8 | 0.0 | 35.8 | 0.0 | 1.2 |
| ア メ リ カ | 48.6 | 20.2 | 7.5  | 11.3 | 7.5 | 11.3 | 11.3 | 6.3 | 0.0 | 1.2  | 0.0 | 2.5 |

表4 「悲しさ/Sadness」をイメージする色 (%)

|      | 黄   | 橙   | 赤   | 青    | 紫    | 桃   | 黄緑  | 緑   | 茶   | 白   | 灰    | 黒    |
|------|-----|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 日本   | 0.0 | 0.0 | 1.2 | 43.5 | 16.6 | 0.0 | 1.2 | 1.2 | 6.4 | 1.2 | 20.5 | 39.7 |
| アメリカ | 0.0 | 0.0 | 1.2 | 29.1 | 0.0  | 0.0 | 0.0 | 3.7 | 2.5 | 3.7 | 53.1 | 21.5 |

表5 「怒り/Anger」をイメージする色 (%)

|      | 黄    | 橙   | 赤    | 青   | 紫   | 桃   | 黄緑  | 緑   | 茶   | 白   | 灰   | 黒    |
|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 日本   | 10.2 | 1.2 | 82.2 | 0.0 | 3.8 | 1.2 | 0.0 | 0.0 | 2.5 | 0.0 | 3.8 | 8.9  |
| アメリカ | 1.2  | 1.2 | 54.4 | 1.2 | 1.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 8.8 | 1.2 | 7.5 | 39.2 |

表6 「性的/Sexy」をイメージする色 (%)

|      | 黄   | 橙   | 赤    | 青   | 紫    | 桃    | 黄緑  | 緑   | 茶   | 白   | 灰   | 黒    |
|------|-----|-----|------|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 日本   | 7.6 | 7.6 | 14.1 | 7.6 | 23.0 | 44.8 | 2.5 | 1.2 | 0.0 | 7.6 | 1.2 | 8.9  |
| アメリカ | 2.5 | 1.2 | 62.0 | 3.7 | 6.3  | 20.2 | 0.0 | 1.2 | 0.0 | 5.0 | 0.0 | 21.5 |

表7 「成功/Success」をイメージする色 (%)

|      | 黄    | 橙    | 赤    | 青    | 紫   | 桃   | 黄緑   | 緑    | 茶   | 白   | 灰   | 黒   |
|------|------|------|------|------|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|
| 日本   | 41.0 | 28.2 | 19.2 | 6.4  | 2.5 | 2.5 | 1.2  | 15.3 | 0.0 | 7.6 | 0.0 | 0.0 |
| アメリカ | 12.6 | 15.1 | 6.3  | 24.0 | 2.5 | 3.7 | 10.1 | 25.3 | 1.2 | 8.8 | 1.2 | 5.0 |

表8 「心/Heart」をイメージする色 (%)

|      | 黄    | 橙    | 赤    | 青    | 紫   | 桃    | 黄緑  | 緑   | 茶   | 白   | 灰   | 黒   |
|------|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 日本   | 12.8 | 14.1 | 37.1 | 10.2 | 1.2 | 52.5 | 2.5 | 3.8 | 0.0 | 8.9 | 1.2 | 1.2 |
| アメリカ | 3.7  | 8.8  | 73.4 | 3.7  | 7.5 | 26.5 | 0.0 | 1.2 | 1.2 | 2.5 | 0.0 | 3.7 |

のアンケートと比較して幾分明らかとなった、特に「悲しさ/Sadness」をイメージする色では、「青色」が多い日本に対して、アメリカは「灰色」が多い、また「性的/Sexy」をイメージする色では日本では「桃色」が多いのに対してアメリカでは「赤色」「黒色」が多い。2つの学校のアンケートだけで、日本とアメリカという違いの比較をすることは出来ないが、日本の生徒の言葉からイメージする色は、表面的な色、たとえば「心/Heart」であるとハートという形を連想し、その代表的な色を答える状況が多く、それに対してアメリカの生徒は、内面的な色、たとえば「心/Heart」であると色々な気持ちの状況を連想して答える状況を多く感じた。

② アメリカの学習環境における色の使用状況について

私が、ノースカロライナ州に滞在している間、4校(エクスプローリスM. S.・マーチンM. S.・ウォルコー

ツE. S.・ニューバーンH. S.)の学校を訪問した。いずれの学校で共通していたのは、玄関・廊下・教室などの学習環境に色があふれていたことである。それぞれの学校ごとに学校カラーが明確に示され、その色をふだんに使いながらデコレーションされている印象を強く感じた。



図1 Exploris教室内風景

特にExploris M. S. は、校舎が新築されて数年しかたっていないため教室の企画そのものにも工夫がされ、オープン的な環境の中に扉・椅子・などの色が機能的に配色されていた。

また、訪問した学校全てに共通して掲示物が色とりどりに掲示されていた。生徒が制作したもの、教師が制作したもの様々であったが、必ず色の台紙を使い、美しくコラージュされていた。日本でも掲示に工夫を凝らしているものを見る機会があったが、個人的な授業作品を整然と掲示した印象が強かった。訪問したいずれの学校も掲示物全体がそれ自体で色面や色空間を作っている感じがした。

#### (4) 今後の展望とまとめ

日本の中学生と、アメリカの中学生の色に関する感じ方を比較する中で、今後の学習環境づくりのあり方を探っていくかについて、アンケートの結果をもとに気づいた点を述べてきた。前述でもあるように色については、個人個人の好みを中心となるために必ずしも日米の比較にならない場合も考えられるが、一人ひとりの生徒の個性をより伸ばしていく上において、様々な経験の中で色を意識させることは、とても大切なことではないかと、今回のアメリカの学校訪問を経験してさらに思いを強くした。色に関しての好みやイメー

ジするものは、少しの差はあるものの、大きな違いはないと感じた。それは、同じ自然の色を感じる人間として共通の感性を持ち合わせていると思える。しかし、色に対する思いの違いは、「〇〇色は、服など色あわせが難しいので好きでない」など直接生活など実際の場面をイメージして自分の好みや考えをはっきり伝えようとする生徒が日本の生徒と比べて多く、色がより生活や学習空間の中に入り込んでいることを感じた。今後の展望としては、アメリカの色をふんだんに取り入れた学習環境を参考に、生徒自らがそれぞれの目的にあった学習環境の色について考え、選ぶ「自主的な」色に対する意識付けが必要であると考えられる。ただカラフルに空間を色づけしていけばいいという問題ではなく、どうしてこの色が必要なのか、あるいは大切なのかということを確認させながら、色に対して意識させていく必要性である。日本において、色は「塗る」「描く」という行為をイメージしているが、アメリカでは、「貼る」「合わせる」というイメージが強く、比較的簡単に色との関わりをイメージしている感じがした。もっと「楽しい」「遊び」感覚で色々な色に関するイメージが出来ると、生活や学習空間の中に色に対する意識が入っていくことが出来ると思う。下の図2は、色の好みに対してのアンケートの複数回答の日米の生徒の数を比較したものである。

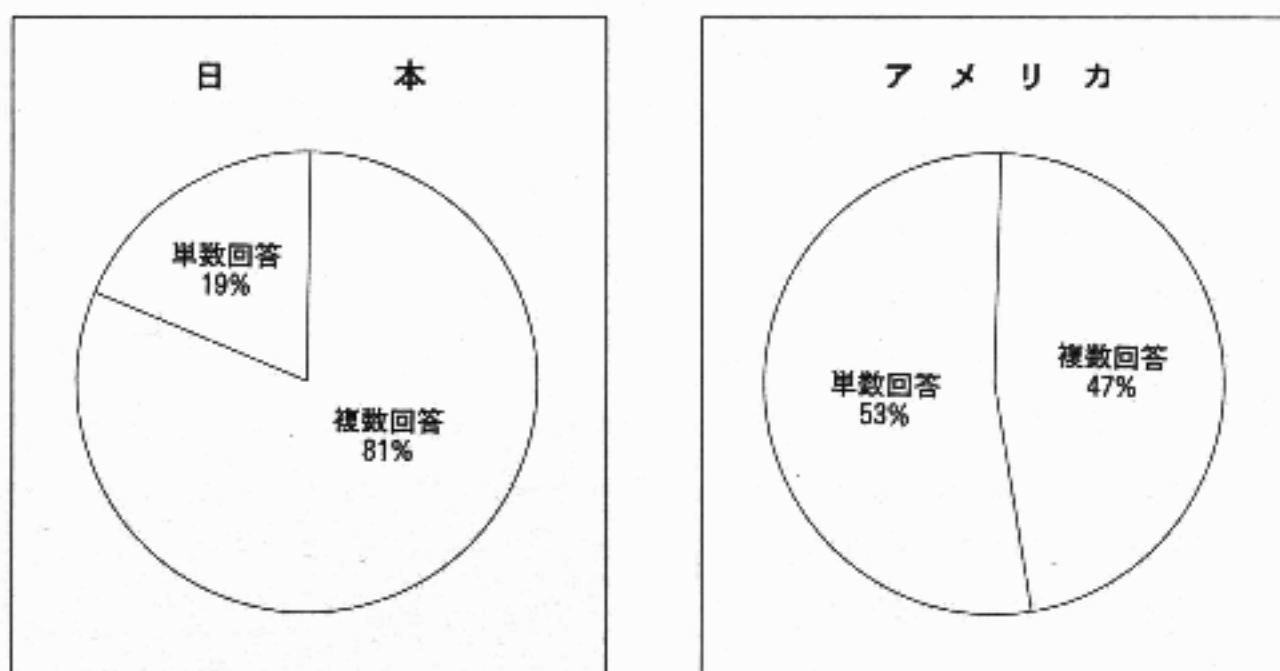


図2 色の好みに対する単数・複数回答の割合 (%)

図2からも分かるように、日本とアメリカを比較した場合、好みの色を単色で回答する割合はアメリカの方がはるかに多いことが分かる。このことは先に示したように、はっきりと意思表示が出来ることを示して

いる。しかし、反面、日本の生徒は、曖昧さをもちながら多くの好みの色を意識しているとも考えられる。今後は、それぞれの色に対する認識を、直接生徒同士でコミュニケーションを行わせながら、個々のもつ色



に対しての感覚、地域によって異なる色の感覚を交流によって深めさせたい。そして、より色を取り入れた、学習効果の高まる環境づくりを進めていきたいと思う。

(資料2)は、アメリカの学校を視察後、美術科(選択教科)の授業のなかで色の学習を発展させ、自分で

選んだ「色」で校舎の空間を塗る取り組みの記事である。実践はまだ始まったばかりであるが、内外から多くの反響があった。生徒たちに「色」が実際に、どのように心理的に作用するのか、引き続き実践を積み重ね、明らかにしていきたい。

#### (資料1) アンケート用紙

| Name                  | Mr /Miss | Age |
|-----------------------|----------|-----|
| 1. Like color         |          |     |
| 2. Not like color     |          |     |
| 3. Now feeling        |          |     |
| 4. Image of Happiness |          |     |
| 5. Image of sadness   |          |     |
| 6. Image of anger     |          |     |
| 7. Image of sexy      |          |     |
| 8. Image of success   |          |     |
| 9. Image of heart     |          |     |



広島大付属東雲中で、生徒が玄関と保健室をペンキでカラフルに塗り替えた。美術の授業の一環で、殺風景な校舎内が安らぎある空間に変身。

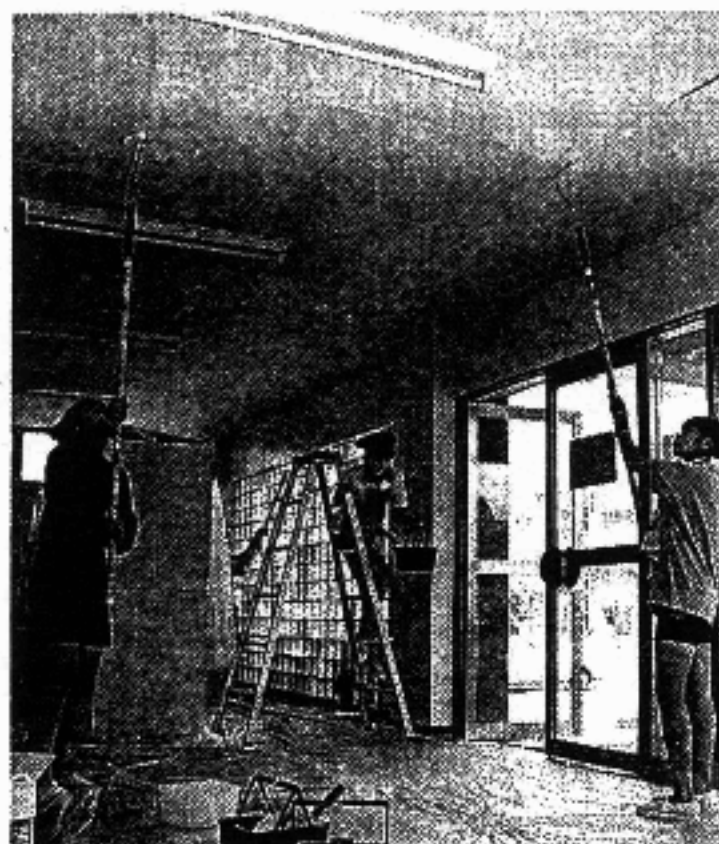
### 授業で塗装 校舎が一変

■—35面

色彩の持つ心理的効果、色、天井を薄オレンジ、を生かし、殺風景な校舎柱を薄ピンクに、げた箱内をカラフルな空間に変は薄黄色に。保健室は「いえようと、広島市南区の「やまと和み」をテーマに広島大付属東雲中で五壁を薄黄色、天井を薄い日、美術の授業で生徒たちが玄関と保健室を六色、今年一番の暑さの中、のペンキで塗り替えた。生徒たちは噴き出る汗を美術選択の三年生十四人が二組に分かれ、はげめぐいながら、色ムラがやローラーを握った。玄出来なよう丁寧に塗った。約一時間で白一色だ関は「明るく元気が出る」つた壁、天井など約百五をテーマに壁を薄黄緑十平方メートルが鮮やかに変身

### 広島大付属東雲中

# モノクロ校舎に



暑さの中、楽しんで壁や天井をカラフルに塗り替える生徒たち

## 玄関と保健室 美術の授業で6色に

した。玄関を担当した小基本的な色の効果を勉強した。小崎彰子さん(2)は「明るい感じになった。学校に心地よいと感じる色を選んできた。美術の三樹正典教師が「色は「色」の持つ心理的効果がわかったと思う。この学習を学校以外でも生かしてほしい」と話していた。引き続き美術室や廊下などを生徒が考えた色に塗り替える。

# ちよびなり

## パートナーシップづくりの展開 —Rose High Schoolの訪問を通して—

広島県立祇園北高等学校 教諭 松崎親男

### (1) はじめに

我が校にはALT(外国語実習助手)が常駐しており、彼(彼女)等がいろんな面で国際交流・国際理解に協力してきてくれた。しかしながらそれは個を通しての交流でしかなく、対学校・対地域社会のレベルにまで発展することはなかった。

この度、2年前からこのプロジェクトに参入でき、

我が校でも「国際交流推進委員会」が発足し、校内に新しい風が吹き始めた。ただ同時に広島県教育委員会から学力向上対策校の指定を受け、生徒・教師共にゆとりがなくなっている実態があることも否めない。

「少しでも前進を!」という思いを胸に本年度もローズハイスクールを訪問してお互いの研究・交流に努めてきた。

### (2) 現地調査の日程

| 日 時  | 場 所   | 内 容   | 関係者・関係機関<br>(所属・所在地・連絡先等)                      |
|--|---|---|--|
| 3/26 (月)<br>8:00<br>8:50<br>9:50<br>12:25<br>14:00 | The office of the Dean of<br>ECU Educational Faculty<br>The office of International<br>Affairs<br>Martin Middle School<br>Wahl Coats Elementary<br>School<br>New Bern High School | ECU教育学部長と面会<br>ECU国際交流課を訪問<br>マーティン・ミドル・スクール<br>を訪問<br>ウォルコーツ小学校訪問(昼食)<br>ニュー・バーン・ハイスクール<br>を訪問 |  |
| 3/27 (火)<br>9:30~<br>15:00                         | New Bern High School  | ニュー・バーン・ハイスクール<br>学校視察及び授業参観  | 4200 Academic Drive<br>New Bern, NC 28562      |
| 3/28 (水)<br>8:30~<br>15:00                         | J. H. Rose High School  | 外国語(日本語)の授業参観、<br>日本の高校に関するQ&A。<br>学校全体の説明<br>校内の施設設備の見学<br>社会科授業参観<br>滞在期間中の行動計画打ち合わせ。         | 600 W. Arlington Blvd.<br>Greenville, NC 27834 |
| 3/29 (木)<br>8:30~<br>15:00                         | J. H. Rose High School  | 地球・環境学の授業参観<br>外国語(スペイン語)・ラテン語<br>の授業参観<br>ESLクラス授業参観<br>職業棟視察・コンピューター授<br>業参観                  | 600 W. Arlington Blvd.<br>Greenville, NC 27834 |

|                            |                        |   |  |
|----------------------------|------------------------|---|--|
| 3/30 (金)<br>8:30~<br>12:00 | J. H. Rose High School | School Resources Officer<br>(校内常駐の警察官)と面談<br>学校長と対談                       | 600 W. Arlington Blvd.<br>Greenville, NC 27834 |
| 3/31 (土)                   | 各自のステイ先                | 各自ホームステイ  |  |
| 4/1 (日)                    | ラレー: Brownstone Hotel  | ステイ先よりラレーへ移動。<br>ホテルにてサマリーミーティン<br>グの打ち合わせ                                |  |
| 4/2 (月)                    | ラレー: Brownstone Hotel  | サマリーミーティング<br>州議会、教育委員会訪問   |  |
| 4/3 (火)                    | ラレー市内                  | Exploris Museum and Middle<br>School訪問<br>Science Museum<br>Shopping Mall |  |
| 4/4 (水)                    | ラレーから関西空港へ             | 帰国  |  |

### (3) 現地訪問中及び帰国後の交流状況

この度、ローズハイスクールを訪問し私の勤務校を比較観察してみて、双方とも改善すべき点は多く見えてきた。

このグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトを通じて双方が交流を深めていって、より良い教育の実現を目指して模索していければ、このプロジェクトの価値は高まる。

ローズハイスクール訪問中多くの授業で担当教諭や生徒と触れ合う機会が持てた。個人的には交流の糸口をたくさん作ってきた。例えば、学習評価の仕方、クラス担任制、日本の校務分掌、クラブ活動のあり方、受験教育の是非などに関して、彼等と多くの意見を交わしてきた。日本の教育に関心を持っている生徒が多く見られた。しかし教師の関心度は個によってかなりの温度差があるようだった。

祇園北高校では、帰国して2度国際交流推進委員会(学校長を含む)を持ったが、残念ながら大きな前進は見られなかった。理由の一つに、本校が昨年度「学力向上対策指定校」に選ばれ、進学校として実績をあげることが最優先事項になってしまっていることがある。教職員一人一人と話していくと、大半のメンバーはこのプロジェクトの主旨に理解を示してくれるが、いざ

「交流を」となるとみな及び腰になる。仕事量が年々膨らむばかりで国際交流に着手するゆとりが無くなっているのだ。

訪問校の実情は、我々のそれらよりもっと深刻であるようだ。一昨年度このプロジェクトで広島を訪れた教師が本年度は非常勤講師になっており、国際交流の推進に協力できる状況ではなかった。また残念なことに、6月に広島を訪れた教員集団の中には、ローズハイスクールの教員の姿はなかった。お互いを理解し思いやることが社会生活の基本であることを考慮すると、今の状況は決していいとは言えない。

そういう状況でも、3学年の英語選択授業やESSのクラブにおいて本校の生徒とローズ・ハイスクールの生徒のメール交換は行われている。本年度は自己紹介に始まり、学校紹介、日本文化紹介、と進んでいる。生徒の語学力から判断するとあまり深い交流はのぞめないだろうがperson-to-personレベルの交流は続けていきたい。

### (4) おわりに

このプロジェクトのゴールである「訪問校とのよりよい関係を推進する」という使命は相手校に真意がうまく伝わらず、また自校の教員集団にサポートしても



らず、十分に達成できなかった。country-to-country, school-to-school, person-to-personという大雑把な交流形態が考えられるが、この度このプロジェクトに参

加させてもらって、どのレベルでも交流できる自信を持って帰国することができた。これを今後の教育活動でいつでも発揮できる形で自分の中で育んでいきたい。

# 日米の高等学校におけるカリキュラム・授業評価方法・ 生徒指導・進路指導について

— 祇園北高等学校とRose High Schoolの比較を通して —

広島県立祇園北高等学校 教諭 松崎親男

## (1) はじめに

地球の裏側で起こっていることをリアルタイムに知ることができ、空路を利用すれば半日で現地に行けるような時代であるが、その土地・人・文化について意外と表面的にしか理解できていない自分にしばしば驚く。8年前に隣のバージニア州で語学研修を受けたことがあり、私はこの界隈の教育事情に関して知りたいことは知っているつもりであった。しかしながら、この度GPSスクールプロジェクトに参加し、学校教育現場に足を踏み込んでみると、知らないことが多く、日本の教育問題を再考する良いきっかけになった。

出国前の事前研修で掲げていた研究テーマは「情報教育の普及、と国際理解」であった。しかし、滞在中

に教育現場を見ていくうちに、それら以外で多くの気になる点が浮かび上がってきた。カリキュラム、教師の仕事内容・分担・資質、生活指導、進路指導など、普段日本では当たり前と思って深刻に考えなかった(考える暇とゆとりが無かったと言った方がよいであろう)それらの事柄と比較しながら、日米の教育がこれからどう変わっていくことが望ましいか、考察してみた。

## (2) 研究の概要

- ① 情報教育と国際理解について。(訪問校ローズ・ハイスクールにおいて)
- ② 日本の高等学校と比較して気になった点。

## ③ 現地調査の日程

| 日 時                        | 場 所                    | 内 容   | 関係者・関係機関<br>(所属・所在地・連絡先等)                      |
|----------------------------|------------------------|---|--|
| 3/28 (水)<br>8:30~<br>15:00 | J. H. Rose High School | 外国語(日本語)の授業参観、<br>日本の高校に関するQ&A。<br>学校全体の説明<br>校内の施設設備の見学<br>社会科授業参観<br>滞在期間中の行動計画打ち合わせ。 | 600 W. Arlington Blvd.<br>Greenville, NC 27834 |
| 3/29 (木)<br>8:30~<br>15:00 | J. H. Rose High School | 地球・環境学の授業参観<br>外国語(スペイン語)・ラテン語<br>の授業参観<br>ESLクラス授業参観<br>職業棟視察・コンピューター授<br>業参観          | 600 W. Arlington Blvd.<br>Greenville, NC 27834 |
| 3/30 (金)<br>8:30~<br>15:00 | J. H. Rose High School | School Resources Officer<br>(校内常駐の警察官)と面談<br>学校長と対談                                     | 600 W. Arlington Blvd.<br>Greenville, NC 27834 |

### (3) 研究の結果と考察

#### ① 「情報教育」と「国際理解教育」について

クリントン大統領時代に、ゴア副大統領が打ち出した「情報スーパー・ハイウェイ構想」はアメリカ合衆国では着実に実を結んでいた。それが8年前の話になるから、私の勤務校の校内LAN工事がやっと始まったことを考えると日本はやはり約10年の遅れをとっていると見えよう。その点において訪問校で視察・調査してみたら次のような点が明らかになった。良い点・問題点を羅列してみた。

まず、オフィス・図書館・メディアルームを始めとして校内いたるところでインターネットに接続できる。ということは、授業・教科指導で必要なときいつでも情報の収集が可能になる。しかしながら情報が氾濫している昨今では、情報の質、信憑性を見極める指導が必要であろう。コンピューターを有効に利用する教育も必要であるが、コンピューターに振りまわされない教育も同時に必要である。

コンピューターの授業参観をしてみて感じたことは、歴史的に古くからキーボードに慣れ親しんでいることであって、生徒たちの操作は実に巧みでスピーディーである。あるクラスでは、仮想の会社もしくは商品の宣伝に関するプレゼンテーションをやらせていたが、画像、文字、音声を効果的に使って実に素晴らしい作品を作り上げていた。就職した際に即戦力になることだろう。

しかしながら、訪問校の教師たちによると、施設設備には大きな問題があるそうだ。施設設備は最先端どころか、予算不足のため、コンピューター本体は今だ「Windows 95」でメモリーも容量も乏しく、故障や、トラブルが絶えないそうだ。しかし何と言っても、ノースカロライナ州では共通カリキュラムの中にNC Tests of Computer Skillsの項目がありK-8の間に習得した技術・知識に関するテストや評価がなされる。従ってハイスクールに入ってくる生徒の大半はコンピューターの扱いには慣れている。

日本では、最近最先端の施設設備を持つ学校が増えてきた。しかし、私の勤務校を例に挙げると、指導者不足であることと、ゆとりを持ってコンピューターを学べるカリキュラムの整備ができていない。宝の持ち腐れである。

日本の大学で、最近講義のレポートをコンピューター

で作成することを義務付けるところがあるが、かなりの生徒が操作に慣れるまで苦勞している。

「国際理解教育」に関して、訪問校で話題にしてみた。ホームルームは学期初めと、終わりにしか機能しておらず、それについてとりたてて特設ロング・ホームルームを持つことはない。アメリカ合衆国は、もともと多種多様な文化、考え方をを持った人々の集まりであり、それらがぶつかりあったり融合したりして、できた国なので、その歴史を紐解くだけでも国際理解教育になるのだそうだ。

#### ② ローズ・ハイスクールを視察して

##### —日本の高等学校と比較して気になった点—

事前学習で挙げていた、上記2項目は自分が予想していたよりはるかに理解しやすく、まとめやすいものであった。しかし滞在中にそれ以外で、学校教育に関する様々な問題点(良い点、悪い点色々)が浮かび上がってきた。そのうちの何点かを挙げてみよう。

まず、施設設備やカリキュラムに関して述べてみよう。ローズ・ハイスクールはPitt County (ピット郡)にある4つの高校のうちの一つで、4つの高校は、ほぼ同じスタンダードカリキュラムにのっとり、日々の学校教育がすすめられている。日本でいう、普通科、工業科、商業科、家政科、養護学校などすべての要素を持った学校である(合衆国ではこれが普通であるのだが)。生徒数は約2,000人で教職員は144名。広い敷地に色々な設備が点在し、あらゆるものが混在している。

カリキュラムをみると、これまた、選択科目も多く、色々なニーズにこたえていろいろ選択できるようになっている。しかし、どれを取ってもいいというわけではなく必修教科の枠組みははっきりしている。ただし授業の中にはいくつか能力別にクラスが編成されている。広島県ではまだあまり多く見られないが、能力別クラスが実働している。

多くの科目は3~4年間連続して学習していく必要がある。成績はペーパーテストの得点やテスト以外の学習活動の評価を総合的に判断して決定され、コンピューター処理でA~Dの表記がなされる。

評価については、ポートフォリオ(紙バサミ)評価というものが目を引いた。ポートフォリオ(生徒一人に一冊)に、入学してからの、色々な学習活動記録、提出物などがはさんである。それは次学年の担当者に引き継がれる。次年度の担当者はそれを見れば前年度

の学習内容がこまかく理解できる。継続指導していく際にはとても役に立つ。ローズハイスクールでは歴史・英語・外国語のポートフォリオを見せてもらったが11年生(高校2年)、12年生のそれはかなり分厚いものもあった。日本ではそれを実践している高校は、少ない。なぜ日本でこのやり方が定着しないのか考察してみた。一つにクラスサイズがあまり大きすぎることや、年度によって担当学年や担当科目が大きく変わったりすることがあることがあげられる。またそれらを保管・収納するスペースの問題がある。

つぎに生活指導のありかたについて述べてみよう。私の赴任校と最も顕著な違いは、責任分担が非常にはっきりしているということだ。教師は自分が授業をする教室がほぼ決まって(固定化して)いる。授業を進めていく上で、大切な約束事があれば、それを名文化し、教室に掲示する。そうして常に生徒にクラスルーム・ルールを喚起しておく。生徒が注意に従わなかった時は、反省室に送られたり、管理職のところへ行かされる。日本の学校には、公務分掌で「生徒指導部」がある。日本では、仕事の大半を、担任と生徒指導部のスタッフでまわす。しかし、アメリカでは、その仕事内容の大半を、管理職や校内反省室のスタッフが担当している。滞在中に校長と話す機会を与えられたが、その前後に、生徒を部屋に呼んでいろいろと説諭している光景が見られた。校長・教頭(4名)は常にトランシーバーを携帯し校内を駆け回っていた。ホームルームというものが日本の学校のそれほど、機能していないので、授業で起こったこと意外、教師はあまり関知する必要がないし、関知したがない。

以上「評価の仕方」、「生活指導のシステム」は私の勤務校のものとは大きく違っていた。「評価の仕方」はアメリカ(Rose High School)のものはきめ細かく(全てがそうであるわけではないが)、テストの得点を評価と勘違いしている多くの日本の高等学校は見習うべきところである。

「生活指導のシステム」に関しては、日本のシステムはまずクラス担任、授業担当、生徒指導部の教員、管理職、保護者と、非常に多くのものがかかわり生徒の問題行動にきめ細かくアプローチしていく(この点も全ての学校や個々の教師に当てはまるものではない)。一方アメリカは、教師の責任分担がはっきりしているため、多くの教師は今以上に問題を抱え込みたくない

という。子供への指導力を持たない家庭があまりにも多く存在するので、かかわったらきりが無いと言う。日本の担任制、生徒指導のやり方は取り入れることが難しいようだ。

生徒指導のシステムと同様に、驚かされたのは、School Resources Officerの存在であった。校内に常駐する警察官のことでローズハイスクールには2名が配属されている。警察官と聞いたとき、スクールシューティングやスクールバイオレンスをなど、アメリカの凶悪な犯罪と結びつけて考えてしまったが、実際彼らの仕事内容はそうではなかった。Resourcesは(まさかの時に)援助をしてくれる人、を意味するものであり、彼らの表情や仕事振りに、荒れた生徒に立ち向かう頑強な男というイメージはなかった。生徒たちに頻りに(フレンドリーに)声をかけて、落ち着いた気持ちで学校生活を送らせることが一番の仕事だという。近隣の小学校を訪問して児童たちに話しかける(講演する)のも彼らの仕事の一つで、Self-esteem(自尊心)を持って生きていくことを中心に児童達に説いていくのだそう。日本の田舎の交番の「おまわりさん」と住民の関係をイメージすれば彼らの仕事振りが理解できるだろう。ということで、ローズハイスクールではここ数年間校内では凶悪な犯罪は起こっていないようだ。ただ生徒の麻薬がらみの問題は増えるばかりで、学校だけでなく社会全体の問題として真剣に取り組まなければならない重要課題だそうだ。

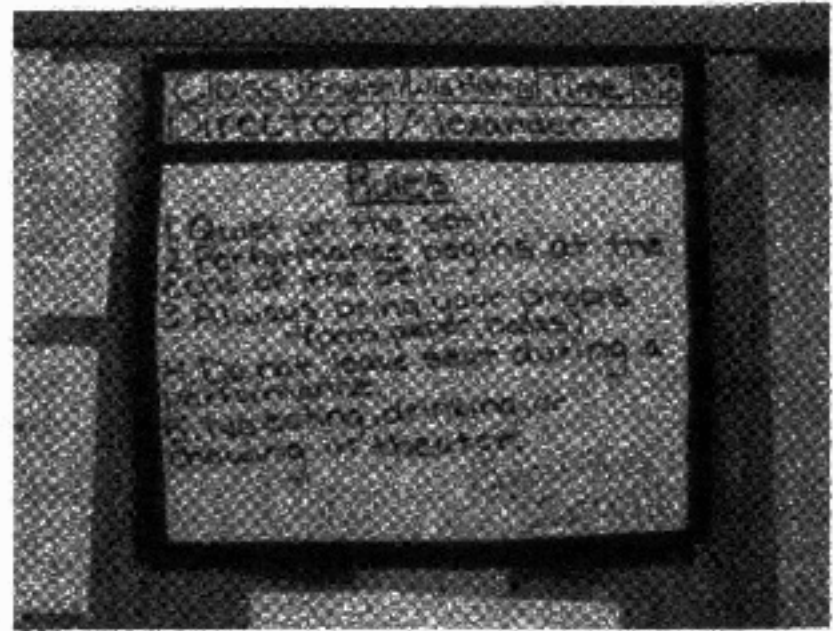
昨年度の調査によると約3分の1の生徒が麻薬を吸った経験を持っており、22%が調査の1ヶ月以内に吸った経験を持っている。マリファナに関して言えば33%の高校生が吸っていて、日本の高校生の喫煙経験を上回る率で増えつづけている。麻薬は常習になるとそれを手に入れる金欲しさに色々な犯罪に手を染め始めること、情緒が不安定になり学校生活が続けられなくなることなどをSchool Resources Officersの一人が語ってくれた。

日本も、離婚率の上昇と共に、教育力のない家庭や、崩壊していく家庭が増えつつある。国際交流、文化交流が悪い意味で進めば麻薬も簡単に手に入るようになる。現在日本の学校教育やライフスタイルはいろんな点でアメリカナイズしているといえるが、麻薬乱用に関してはアメリカの後を追って欲しくない。





(ローズ・ハイスクールS. R. Officerと)



(各教室に掲示してあるClassroom rules)

#### (4) おわりに

このプロジェクトに参加して、普段何気なく、また何の疑問も抱かずこなしていける仕事内容や、教育活動 — 学校体制、授業内容、評価、教師の仕事内容・分担、責任範囲など — を振り返る良いチャンスになった。情報が行き交えばお互いがいろいろな形で影響し

合い変化していくことが可能になる。お互いが良い方向を模索し前進していける糸口が与えられ大変喜んでいる。この体験を活かし、今後 country-to-country, school-to-school, and person-to-person のどのレベルでも交流が出来るよう情報収集・交換、研究活動を続けていきたい。

# グローバル・パートナーシップの展開 ーニューバーン・ハイスクールの訪問を通してー

広島県立広島井口高等学校 教諭 西木 豊

## (1) はじめに

2001年3月23日から4月5日まで、グローバル・パートナーシップ・プログラムの一員に加えていただき、アメリカの学校を視察する機会を得た。このプログラムの目指すものを念頭に置き、現在勤務している学校でできることは何かを考えながら研修期間を過ごしたが、明確な答えを見出せないまま帰国の途についた。その後、訪問した学校（ニューバーン・ハイスクール）から4名の先生が本校にこられ、姉妹校提携に対する熱い思いが感じられたが、残念ながら提携には至らなかった。成果として、「生物」と「家庭科」で具体的に協働できるものが見つかり、今後両校で実施する運びになった。何より喜ばしいのはお互いの訪問が今回で2度目となり、お互いの「構え」も少なくなり、より自然体で接することができるようになったことである。言葉の壁や文化の壁があるものの、「友情」を通してお互いが協働できることをもっと模索していきたいと考えている。

## (2) ニューバーン・ハイスクールについて

### ① 生徒・学校の様子

日本の生徒と比較すると、生徒はどこか大人びているような感じを受ける。日本の生徒が大人になりたくないと思うのと同じくらい、アメリカの生徒は大人に見られたいと思っているのではないかと感じた。より大人に見える理由として制服ではないこともあるが、規則を破ったときや、やらなければならないことをやらなかったときの自己責任をきちんと取らせているからではないかと思う。

とかくアメリカの学校での生徒の服装は自由と思われがちであるが、服装規定（Dress Code）があり、きちんと守る義務を生徒は負っているし、学校はその規定に基づいてきちんとした指導をやっているように見受けられた。ちなみに、サンダルを履いてくる生徒や、肌の露出部分が多い服装、短いスカートをはいている生徒はいなかった。

生徒がいる場所には必ず職員がいる。4つの時間帯

に分かれたランチタイムも、教員が輪番で2人ずつ監視をしていた。生徒が通常使用する空間における安全性を確保し、何か事件があってもすぐに対処するためであるようだ。消極的な見方をすると、何かあったときのために説明責任をきちんと果たせるようにということらしい。別の例を挙げると、教室にはきちんと鍵がかかるようになっておりその教室の管理者である教員は、部屋を空けるときは必ず教室をロックしておく。校舎内から外には簡単に出ることはできるが、外から中に入ろうとするとドアがロックして入ることができない。正面玄関か、校舎内にいる人にあけてもらわないと入れない仕組みになっているのである。

### ② 学校組織について

日本の高校の教師は、教科指導、生徒指導、進路指導、HR指導など仕事内容は多岐にわたっている。一方、アメリカの高校では分業がはっきりしていて、教師は自分の教科指導に全力を注げる環境にある。校長が授業をチェックするなど、教師の指導力は一定の基準に基づいて査定されている。

問題行動の対応は副校長が行う。副校長はトランシーバーを持ち、授業中に公舎内を巡回しているか、問題のある生徒を自分のオフィスに呼んで話をしているという光景をよく目にした（中がよく見えるように、オフィスの扉を開けて生徒と話をしていた）。

ニューバーン・ハイスクールには、生徒指導を行うチル・アウト（反省室）があるが、こちらは主に2人の管理者を中心に、学校の規則違反者（授業中の私語やマナー違反、遅刻、怠学、喫煙、その他の問題行動を引き起こしたものを）を指導しておられた。

進学相談や就職相談はカウンセラーが行っている。カウンセラーは、それぞれの部屋を持ち、生徒の悩みに個別に対応をしている。

### ③ 授業について

ニューバーンという町の中で、唯一の公立高校ということで、さまざまなコースを用意している。言ってみれば日本の総合学科のようなものであるのだが、学校の中に印刷、新聞作り、コンピュータグラフィック、

工芸、JROTC (卒業後軍隊に入りたいと思っている生徒が取るコース) などがあり、多様な生徒のニーズに応える専門教科をそろえている。

授業は、90分で4限目までである。休憩時間はたったの5分である。従って生徒は5分の間に教室移動を行わなければならない。9週間がひとつの学期の単位になっており、生徒は4限まで、9週間、毎日同じ時間割で授業を受ける。4限目終了後は、遅刻してきた生徒を残して補充を行ったりもする。教師は基本的に一日当たり4コマの中の3コマを担当する。教師にとって教室は準備室でもあり、プライベートな空間でもある。日本とは違って、授業のあいているときは教室が教材研究の場、テスト作成の場になるし、教室を空けるときには、必ず鍵をかける。

同じ教科を複数人で受け持つのは、日本と同じであるが、教科書のどこを、どのように教えるかということとは統一されていないので、同じ学年であっても先生によって教えるところが違うということが生じている。また、どの範囲までをいつまでにやるといったことも統一していないため、教員が自由裁量でやっているという印象である。そういった制約の少ない中、授業でいろいろな動機付けを工夫されており、授業に「余裕」がありうらやましく思った。また、日本の高校の場合、学年をまたがって教科を受け持っているが、アメリカの場合何年生担当というのがはっきりしている。

授業を見ての感想は、授業規律を保った上で、生徒と教師が人間関係をうまく保ちながら、生徒からの疑問や意見を聞きながらの授業が多かった。私が、日本のことについて話したときも、たくさんの質問をしてくれた。講義形式の授業(生徒とのインタラクションが少ない授業)が、日本の高校の場合には多いのではないかと推察するが、こういったアメリカの授業に学ぶべき点は大きいのではないかと思う。

授業規律に関しては、先生に質問をする場合や意見を述べる場合は手を上げてから行うということが基本とされているし、授業中に居眠りをするような生徒は一人もいなかった。生徒は教師の指導には従わなければならないし、授業規律を乱したものはチル・アウトに行かされることになる。

一方、サボって廊下を歩いている生徒にたくさん出くわしたが、教室にいる教師が注意するといった場面は見ることはなかった。教師にとっては、教室に来て

いる生徒をきちんと教えるのが仕事であり、サボっている生徒は自分で責任を取るのだという考え方が多いのではないかと感じた。

### (3) 姉妹校提携の可能性

本校はすでに、オーストラリアとハワイに姉妹校を持っており、長期休業を利用して、生徒の交流を行っている。生徒の交流とはいえ、安全面や、学校の責任として生徒だけで姉妹校に行かせるわけにはいかず、引率の教員がついて行かなければならない。その予算は県費ではなくて、PTAから補助していただいているのが現状である。このことを考えると、ほかな資金源がない限り、新たに生徒をお互いの学校へ訪問させることは難しいと考えている。

しかし、このことを課題としたまま、今本校が提携している姉妹校とは違った形で、ニューバーン・ハイスクールと交流をしていくことは可能である。たとえば、ニューバーンとのE-mailでの交流(既に、本校の英語部とニューバーンの新聞コースを取っている生徒との間で行っている)を、もっとたくさんの生徒が参加できるように広げていったり、メールの内容もお互いの個人的な興味関心に終始するのではなくて、日米のさまざまな比較研究をしたりすることができる。

また、平成15年度から「総合的な学習の時間」が実施される。この時間を利用して、生徒に個々の教科学習では身に付けることのできない、これからの社会を生きていくのに必要な「学力」をつけていきたいと考えているところである。いろいろな角度から物事を見ることができる人間、難しい局面を処理することができる人間、新しい判断や発想ができ、その根拠を示すことができる人間の育成のために、ニューバーンとの交流を生かすことができるはずである。例えば、ある解決が困難な場面を設定し、その解決方法を両校の生徒に問うてみるのである。生徒たちに、ニューバーンの生徒の解決方法も含めて提示していけば、日本人が考えつかない全く異質なものの見方や考え方を発見するはずであり、それによって生徒のものの見方・考え方の幅も広がるだろうと思われる。

教科で連携する場合を次に考えてみる。本校の英語科の場合、年度始めに年間指導計画が各学年担当から出され、毎週行われる科会で、進路状況がチェックされるとともに、教える内容及び補助教材についても統

一されている。非常に逼迫した時間数の中で一定の教育内容を教えることが要求されるわけで、教科書や問題集から離れた内容を時間をかけてやっていくということはできない。まずは、年間計画を立てる前段階で、ニューバーンと連携して行う内容を精査し、どれくらいの時間を使って、どのように行うのかといった案を教科会で決定していくという手順を踏んでいかなければならない。

他の教科においても、ニューバーンと連携したら、教育効果が上がると思われる単元をあげてもらったり、ニューバーンではどのようにこの単元を教えているのだろうかといった疑問を出してもらったりすれば、本校の国際交流部を通じて連絡を取り合うことができる。

#### (4) おわりに

姉妹校提携の大きなメリットは、お互いの学校を訪問しあい交流を深めることにあるが、現時点では、生徒同士の訪問は難しい状況にあるし、一定期間教師がお互いの学校に行って教えるといった交流も難しいの

ではないかと思う。しかし、ニューバーンと連携することによって生まれる教育効果は大きいと考えており、訪問以外の交流をまず進めていきたいと考えている。そのためには教師が、教科やクラブ活動、あるいは学校総体として、協働して何がやれるのか、何をやりたいのかということがまず出てこなければ、前進していくことはできない。今回ニューバーンから4名の先生方をお迎えしたところ、本校との姉妹校提携にかける大きな意気込みを感じた。その熱意に応えるためにも、できるところから少しずつ連携の輪を広げていきたいと思う。今回、訪問された先生の中に理科と家庭科の先生が含まれていたことが大きな要因となり、両科目で協働していくものが見つかった。これが起爆剤になって他の教科に広がっていくことを期待しつつ、また一方では、各教科で何ができるかを提案していきたいと考えている。最後に、このプログラムに参加させていただき、違った角度から日本の教育について考える機会を与えていただいたことに深く感謝し、これからの教育実践に生かしていきたい。